

を積極的に用い、考試の席には漢籍と共に蘭書が用意されていた。漢方を固守して無批判に蘭学を排除するというような態度は無かったのである。

(平成十五年六月例会)

### 西南戦役と神奈川県下の官修墓地

中西 淳朗、松本 龍二

西南戦役が終って百二十五年以上が経過したが、官軍方の記録、なかんずく旧士族を中心とした臨時調査を主力とする新撰旅団についての記録は誠に少ない。極言すれば、初戦より終戦までの一貫した召募調査の従軍記録がないことが、新撰旅団の足跡を不透明にしている原因と考えられる。

横浜市西区久保山共葬墓地の第九区に、西南戦役で死没した調査の墓が五墓ある。地震や空襲で破損が激しく氏名の明確でない墓が三墓あり管理事務所でも不明と言っている。

神奈川県史料によると、県下では旧小田原藩士に向けて新撰旅団への召募が行なわれたが、三十名ほどの応募しかなく、農民、商人にも召募をすすめてやっと九十名が集まった。そこで明治十年五月末に五十一人を戦地に送りこんだと言われている。

その中で死亡したる者は五名で、出身地は県史料によれば横浜、八王寺(当時は神奈川県)、三浦半島、足柄上・下郡と

なっている。

久保山官修墓地の五墓の墓碑からの推定では、十月下旬に入ってから死亡と考えられた。即ち、城山陥落は九月二十四日であるので、城山攻防戦による死亡ではない。多分、鹿児島引揚中、船内で腸管急性伝染病に罹患し、大阪臨時陸軍病院に入院したが、不幸にも死亡されたと考えられる。陸軍第二旅団付属軍医の手塚良仙の経過(鹿児島市内で赤痢に罹患し、大阪へ送られて死亡)と同様の戦病死である。

当時の政府は、はじめの大きな内戦ということもあって、慰霊という行為を招魂社で行った。その対象者は、軍籍の有無を問わず戦地で銃弾、刀剣にて死亡した者に限った。従って伝染病などの平病による死亡者の招魂社祭祀は行なわなかった。(明治三十一年九月の陸軍省告示で特旨をもって合祀となる)。

明治十年頃は戸籍のはっきりしない者も多く、本籍地がわかっていても遺骨の引き取り手のない戦病死者が多くいた。この様な状況であったので、政府が墓碑を造成し祭祀を実施する特別の墓地を、無籍に近い死者のため官修墓地と名づけて提供した(昭和五十六年以降は祭祀を地方自治体が行うように法改訂された)。県下のその一が久保山共葬墓地第九区にあるのである。

共同演者の松本龍二は、平成十四年、横須賀市追浜地区の鉞切山にも官修墓地があることに気附いて探訪すると共に、文献の発掘に努めた。その結果、この墓地は新撰旅団の面々

が、和歌浦丸と東海丸に分乗し帰還中、船内でコレラが発生し、十月十〜十五日頃に追浜についたことがわかった。両船は長浦湾口で停船を命ぜられ、浦郷村の箱崎に避病院が急造されコレラ患者を収容した。十月中旬以降は毎日数人ずつ死亡し、十一月には計四十八名の死亡者となった。当初、遺体を黒崎地区に埋葬したが、大正二年に海軍の用地として整地された折、追浜の鉈切トネルの上に墓石をたて官修墓地とした。現在では地元の浦郷町内会が祭祀・管理を代行している。

この墓地には四十八基の墓石があり、警視局関係三十二名、うち新撰旅団三十名、船舶従業員七名であった。また士族は二十五名、うち東北列藩同盟関係士族は八名であったが、福島県人は一人も見ない。また神奈川県では士族、平民各一人となつているが、県の方への報告はなかつたと思われる。

久保山の方々には氏名が判然としないものがあると述べたが、追浜の方々は、昭和三年に発刊された田浦町誌にその名が記載されており、それにより現在迄に二名の方の遺族が何十年ぶりに参拝に來られた由である。

なお、この地所内に北村包直（県立横須賀高女初代校長）撰文の顕彰碑がたつてゐる。

（平成十五年九月例会）

## 漢方製剤の医史学補遺

菊 谷 豊 彦

戦後、一九四七年（昭和二十二年）武田薬品工業（株）研究所の渡辺武、後藤実の両氏は日本薬学会近畿支部例会で「漢方方剤の煎出法に関する研究」、翌年には薬学会で第二報「漢薬類の精油含量について」、一九五三年（昭和二十八年）には日本東洋医学会第四回総会で発表し、「漢方方剤の煎出法に関する研究」（第二報）と（第三報）を（日本東洋医学会誌四巻二号）原著としてゐる。

この論文を基礎にして大阪の小太郎漢方製薬（株）などが漢方製剤を製造・販売するに至つた。

すでに一九四七年（昭和二十二年）に武田薬品工業（株）は平胃散をエキス剤にして「マミール」を製造・発売したといわれる。

一九五〇年（昭和二十五年）の日本東洋医学会有志が武田薬品工業（株）の技術により、必要な揮発分もとり入れた漢方エキス剤を二十種作り、臨床効果の判定を呼掛けたが、反応はほとんどなかった。

当時エキス剤の開発にもっとも熱心であつたのは小太郎漢方製薬（株）であつた。

なお、一九五〇年（昭和二十五年）三月には日本東洋医学会が発足し一九五四年（昭和二十九年）には東亜医学協会が